幻想郷追想剣舞

花音ユリ@Flow☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想郷追想剣舞

【Ｎコード】
Ｎ８８８７Ｚ

【作者名】
花音ユリ@Ｆｌｏｗ☆

【あらすじ】
これは所謂「氷の女王異変」の一月ほど前の話。
剣の鍛錬をしていた妖夢とカズホの二人、それを見守る西行寺幽々子。
これは、そんな三人の日常を描いた物語である。

（前書き）

みなさんどうもご無沙汰しております花音ユリ@Ｆｌｏｗ☆です。
今回は前回の幻想郷夢祭縁起（以後夢祭縁起）を見た友人からのリクで、作中に一瞬出てきた妖夢との鍛錬の話を書いてみました。相変わらず百合要素全開なので、苦手な方は御引き取りください。
また、今回もオリ主至上主義でことが運ばれますので、そちらが苦手な方も無理しないでください。
時間軸は夢祭縁起より１月ほど前の頃となっております。
といっても書いたのは夢祭縁起から１月後くらいなので、多少の矛盾があるかもしれませんが、オールスルーでお願いします。
それでは、幻想郷追想剣舞、ゆっくりみていってね！！

「ふっ！はっ！！」
ある日の白玉楼の庭先。そこで私と妖夢さんは二人で剣の鍛錬をしていた。
「ふぅ…いやー、それにしてもすごい上達早いですね。カズホちゃん」
「いえ、それほどでは…」
「ふふっ、もっと自分に自信を持っていいですよ。それはカズホちゃんの才能なんですから」
相変わらずというかなんと言うか、妖夢さんはとても褒め上手だ。これじゃあいくら自分に自信がなくても照れてしまう。
私は照れそうになるのを止めるべく違う話題を持ち出した。
「そ、そういえば妖夢さんはいつから剣を？」
「いつから…ですか？」
妖夢さんは手を止めて考え始める。
「うーん…よくわかりませんね。気づいたら剣を振るっていて、それが今まで続いている感じです」
「へぇー…なんだかすごいですね」
「そうでもありませんよ。私たちが物心着いたら言葉を話せるようになるのと大体同じです」
「それは同じじゃない気がするんですけど…」
少しの間二人で雑談をしていると、奥の部屋から幽々子さんがやってきた。
「二人ともー、お風呂の準備できたわよー」
「あ、はーい！…じゃ、いきましょうか」
「そうですね」
剣の鍛錬のあとは妖夢さんと一緒にお風呂に入るのが、最近の日課のようなものになってきている気がする。

「カズホちゃんまた背伸びたんじゃないですか？」
「えっ？そうですか？」
「そうですよ。最近少し見上げ気味で話してるんですよ？」
「そう…なのかなぁ…？」
　そんなことを話しながら、汗でぬれた服を脱いでいく。服はお風呂に入っている間幽々子さんが洗ってくれる。いっつも大丈夫だって言ってるのに、「私もなんか手伝いたいから」とまったく聞いてくれそうに無いので最近はすっかりまかせっきりになっている。
「ふぅ…気持ち良いですねぇ」
　お風呂は露天式の石造りになっていて、それなりに広さもある。春先なら綺麗に咲いた桜を見ながら入る事だって可能だ。
「ところで、妖夢さん幽霊なのにお風呂入るんですね？」
「ああ、それはですね…」
　妖夢さんはお風呂のお湯をすくって見せた。
「このお湯は霊力がたくさん溶け込んだ霊湯で、幽霊の私でもこうして触れたり、温かさを感じたりすることができるんですよ」
「それ…いまさらですけど私が入ってて大丈夫なんですか？」
「大丈夫ですよ。カズホちゃんは特に抗霊体質ですから、このお湯に溶け込んだ霊力が身体に入り込んだり、何か障害が起きたりなんてことは無いと思いますから。それに…」
　妖夢さんが私の手を握って微笑んだ。
「何かあったら、私が責任を持って看病しますから！」
「妖夢さん…」
「あらら～？それは聞き捨てならないわねー」
　突然の声にあわてて振り返ると、そこには幽々子さんが立っていた。
「カズホちゃんの看病なら私もしたいなぁー」
「幽々子さん？！って幽々子さんもお風呂入るんですか？！！」
「いいじゃないたまには。今日はお洗濯もすぐに終わったし、一緒

に汗を流したいのよぉー」
　幽々子さんはそんなことを言って湯船に入ってきた。それにしても…
「ふぅー、気持ちいいわねぇー」
（なんていう巨乳…）
　どうやったらあんなに育つのだろう？生前の幽々子さんもこんなにあったのかなぁ…
　そんなことを考えてると、なんだか気分がブルーになってきた。ふと妖夢さんのほうを見ると、妖夢さんも同じようなことを考えていたようで、顔を半分までお湯につけていた。
「んー？二人ともどうしたのかしらぁ？」
「別に…」
「な、なんでもない、です…」
　私たちの反応を見て、幽々子さんが怪しげな笑みを浮かべた。
「おやおやぁ～？どうしちゃったのかしらぁ？」
「わひゃあっ！！」
　いきなり幽々子さんに後ろから抱きつかれて、変な声を上げてしまった。
「い、いきなり何するんですかっ！？」
「べつにぃ～？カズホちゃんは自分の身体に自信がないのかなぁって思っただけよぉ？」
「だからっていきなり抱きつくこと無いじゃないですかぁ！」
「身体にメリハリつけるなら他のヒトに触ってもらうのが一番なのよぅ♪」
「えっちょっ幽々子さん何処触って…ひゃうんっ！！」
「うふふっ、かわいい声出すわねぇ♪」
　その後数分間、私は幽々子さんに弄ばれた。
「はぁっ…はぁっ…」
「だ、大丈夫ですかカズホちゃん！？幽々子様も調子に乗りすぎですよ！」

「だってぇ、反応がすごくかわいかったんだもん」
「だもん、じゃないです！」
その後は幽々子さんが妖夢さんにひどく説教されるという珍しい光景を目にし、夕飯をご馳走になった勢いで今日は白玉楼に泊めてもらうことになった。
寝るところは、何かを訴えかける幽々子さんの目を受け流し、妖夢さんと一緒の部屋にすることにした。
「今日は大変でしたね」
二人分の布団を用意している時、不意に妖夢さんが言った。
「まあ、そういう展開には慣れてますから」
「それでも今日の幽々子様はちょっと調子に乗りすぎてましたよ…」
妖夢さんはそういって軽いため息を吐く。私はというと、苦笑を浮かべながら妖夢さんの話を聞いていた。
「でも、楽しかったですよ。幽々子さんに説教してる妖夢さんも見れたし、それでプラマイゼロです」
この言葉に安心したのか、はたまた恥ずかしかったのか、妖夢さんの顔が少し赤くなった。
「カズホちゃんがそれでいいなら、いいんですけどね。それじゃあ明日も早いし、もう寝ましょうか」
「はい！」
月明かりが照らす部屋の中心に布団を2つ並べ、私たちはそれぞれ眠りについた。

次の日、朝日のまぶしさに目を開けると、顔のすぐ近くに妖夢さんの顔があった。
（よ、妖夢さん！？）
急に起きて起こしてしまうのも悪いと思ったから、妖夢さんが起きるまでじっとしてることにした。
改めてみると、妖夢さんの寝顔ってかわいいよなぁ。
「ん…カズホちゃん…？」

「あ、おはようございます」
妖夢さんがうっすらと目を明ける。やっぱり妖夢さんも朝に弱いのか、少し辛そうだ。
「さ、起きますよ妖夢さん」
「もう少し待ってください…光に目を慣らすので…」
寝ぼけているのか、妖夢さんはそういいながら私の首元に腕を回してきた。
「よ、妖夢さん…？」
「もう少し…もう少しなんで…」
妖夢さんは、私を抱きしめる力を緩めようとしない。そんなに強く抱きしめられたら、なんか胸がドキドキしてくるよ…
「おっはよぉ～ぅ！朝よぉ～！！」
「うわぁ！！」
幽々子さんのいきなりの奇襲で、私は咄嗟に妖夢さんを抱きしめてしまった。
「あらあらぁ～、二人とも朝からお盛んねぇ～？」
「違うんですっ！！これはその、えっと…」
必死に弁解しようとするが、お互いに抱きしめあっているこの状況では、全然説得力が無い。
「と、とにかく一回出てってください！ちょっと状況立て直すんで！！」
「つれないわねぇ～」
幽々子さんはしぶしぶ部屋を出て行った。
「ふぅ…妖夢さん、そろそろ起きてください！朝ですよ」
私は妖夢さんの肩をゆすって妖夢さんを起こした。
「カズホちゃん…？」
「おはようございます。妖夢さん」
「おはようございます…って、わぁっ！！す、すみません！！」
妖夢さんはあわてて腕をどけた。その時の妖夢さんの顔は、耳まで真っ赤になっていた。

「ふふっ、可愛かったですよ妖夢さん」
「もう、からかわないでください！！」
二人に微笑が走る。やっぱり、妖夢さんはいいヒトだ。

居間に行くと、幽々子さんがコタツに入って私たちを待っていた。
「あら、もういいのぉ？」
「だからアレはですねぇ…」
「？」
私と幽々子さんのやり取りを、妖夢さんは頭の上に「？」を浮かべながら聞いていた。やっぱりあの時は寝ぼけてたんだな。
私たちは3人でコタツを囲み、朝ごはんを食べることにした。朝ごはんは、幽々子さんと妖夢さんのやり取りを眺めながら、時々話に参加してゆっくりと食べた。
朝ごはんの後片付けは幽々子さんがやってくれることになったから、私たちは腹ごなしに庭に出て昨日の鍛錬の続きをすることにした。
「さて、それじゃあ今日は抜刀術を教えましょうか」
「抜刀術、ですか？」
「はい。攻撃に少々コツが要りますが、使いこなせれば剣術の中でもトップクラスの攻撃力を持つ技です」
妖夢さんはそういって自分の刀に手をかけた。
「いいですか？どんなに切れ味のいい刀でも、闇雲に振るっているだけじゃ威力は落ちてしまうんです。ですから、相手の動きに合わせて集中して、抜刀の瞬間を当てれば…」
妖夢さんは丸太に向かって刀を抜いた。その瞬間、丸太は真っ二つに切り裂かれた。
「…とまあ、こんな風に相手に大ダメージを与えることが可能です」
「わぁ、すごいですね！私にもできるようになるんでしょうか…？」
「もちろんですよ！カズホちゃんは元々剣の才能もありますし、コツさえ掴んでしまえばすぐにできるようになります。練習あるのみ

ですよ！」
「はい！」
　この日はずっと抜刀術の練習になった。日が暮れる頃には、妖夢さんほどではないにしろ、私にも抜刀術が使えるようになっていた。
「やっぱり飲み込みが早いですね、カズホちゃんは」
「ありがとうございます！でも、まだまだ妖夢さんには追いつけそうに無いですね…」
「そんなことありませんよ！私もいつか、カズホちゃんに背中を預けて戦える日が来たらいいなって思ってますから」
　妖夢さんはそう言って笑った。私も、妖夢さんに教えてもらったことを活かせる日が来るのを願っている。
　そしていつかは、妖夢さんの言ったように、一緒に戦える日が来ることも…

幻想郷追想剣舞（東方二次創作）
終幕。

（後書き）

お疲れ様でした。幻想郷追想剣舞、楽しんでいただけましたか？
自分で読み返してもなんでこんなのができたのか不思議でたまらないです。
次回はいつになるか分かりませんが、できれば転生当初の話も描きたいなと思ってますので、それほど期待せずに待っていてください。
それでは、また次回の投稿でお会いしましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8887z/

幻想郷追想剣舞

2011年12月27日23時52分発行